

庄野潤三の文学と帝塚山

帝塚山学院創立100周年記念文化講演

庄野潤三の文学と帝塚山

日本大学芸術学部文芸学科
上坪裕介

私は七年ほど前に「庄野潤三研究——場所論的考察——」というタイトルで博士論文を書きまして、その論文のご縁で、本日こうして皆さんの前に立たせていただいております。今日は「庄野潤三の文学と帝塚山」という題でお話しさせていただきますけれども、私の

上坪裕介

敬愛する庄野文学の魅力を皆さんになるべくわかりやすくお伝えできればというふうに思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

庄野潤三の文学と帝塚山

- ①庄野潤三について
- ②庄野文学の特色
- ③庄野潤三と帝塚山

まず初めに、本日の構成からご説明します。全体を大きく三つに分けて進めていきます。一番目は「庄野潤三について」という項目ですが、こちらは、いまこの会場にいらしている皆さんの中で、庄野潤三について詳しい方、それからあんまりご存じない方、さまざまかと思えますので、簡単ですが、その人生と文学の特徴をご紹介します。

次に「庄野文学の特色」という二番目です。前の項目でお話する文学の特徴がごく一般的な庄野文学理解に基づいたものであるのに対して、こちらは、私が考える庄野文学とは何か、その魅力とは、といったことについてお話しさせていただきます。一般的な理解と共通する部分とそうでないところがあります。それから最後は、「庄野潤三と帝塚山」というふうに題しております。庄野にとって、この大阪の帝塚山という土地

は故郷であるわけですが、その故郷が、彼の文学とどういうふうに関わってきたのかということ掘り下げていきたいと思えます。

①庄野潤三について



それでは早速ですが、進めていきます。まず一番目、「庄野潤三について」ですね。こちらの写真は、五二歳ごろに、ご自宅のお庭で撮られた写真です。

庄野潤三 略年譜

- 大正10年2月9日生まれ
- 帝塚山学院初代学院長 庄野貞一の三男(帝塚山学院小学校開校 大正6年)
- 帝塚山学院幼稚園、小学部卒業

庄野潤三は大正十年の二月九日のお生まれです。帝塚山学院の初代学院長を務めた庄野貞一氏の三男として生まれました。帝塚山学院の開設が大正六年で、当時、既に学校があったので、幼稚園と小学校に関しては帝塚山学院で学んでおります。

こちらは親子で撮った写真で、一歳半のころです。抱っこされているのが潤三さん本人です。その後ろに、父親の貞一氏と、お母さんの春慧さんが写っております。



庄野潤三 略年譜

- 住吉中学校、大阪外国語学校英語部
- 住吉中学の先生だった伊東静雄に師事
- 九州帝国大学法文学部東洋史専攻

学部の前身にあたりません。

この時期の最も特徴的な出来事として詩人の伊東静雄に師事したことが挙げられます。住吉中学の一年生のときに、伊東静雄は国語の担任だったのですが、当時庄野はまだ詩や文学についてそれほど関心がなかったため、そのまま国語の先生として習っただけで終わってしまいました。

実際に交流が始まるのは大阪外語へ進んでからです。

先ほど、幼稚園と小学校は帝塚山学院に学んだというふうにお話ししましたが、まだ当時の帝塚山学院には男の子が学べる中学校というのがありませんでした。そのため、庄野は小学校を卒業すると近くの住吉中学校へ進学をします。その後、大阪外国語学校英語部というところへ進むわけですが、現在の大阪大学の外国語

庄野は本屋で偶然、他の著名な詩人たちと一緒に並ぶ、伊東静雄の本を見つけます。とても立派な、豪華な装丁の本で、それに思わず手を伸ばして買って帰ります。読んでみると、その詩に強く惹きつけられ、以後、かつての恩師である伊東静雄に対して敬愛の念を抱くようになります。そのすぐ後、電車の中で、二人は偶然再会を果たします。いまま路面電車が帝塚山に走っておりませんが、上町線ですね、あそこの中で再会を果たすわけです。それで、先生、お宅に遊びに行ってもいいでしょうかというような話をして、どうぞ遊びにいらっしゃいということ、それから師弟関係を結ぶことになります。

この師弟関係、とてもつながりの深いものだったわけですが、その一端を垣間見ることができ文章があります。後に庄野潤三が、師匠である伊東静雄のことを振り返って書いた文章ですが、ちよつとご紹介したいと思います。

僕は、伊東先生ほど大きな愛で僕を見守り、僕を認め、僕を育ててくれる人に、またと会えようとは思わない。

三国ヶ丘の家へ最初に伺ったのが十六年三月、

先生は詩集『夏花』を出された後の頃であったが、それから『春のいそぎ』、『反響』と、二つの詩集が出される間の八年間を、僕は絶えず先生と一緒にいてお話を聞くことが出来た。

あんなに優しく教えて頂き、励まして頂いたことを思うと、先生の死を損失と思う気持ちよりも、自分が恵まれて伊東先生と共に過した年月を幸福に思う気持ちの方が強い。

自分の文学の行末をもっと長生きして見ていてほしかったと思うし、之から先どんなにいい作品を書いて先生に喜んでもらうことが出来ないと思うとやはり淋しいけれども、それも今では贅沢なことのように思える。(庄野潤三『反響』のころ)『庭の山の木』所収)

と、こんなふうに書いておられます。本当に全人的なというか、とても深いつながりがうかがえる文章です。庄野の伊東への愛情や敬慕の念といったものを感じていただけると思います。

この再会の後、庄野は福岡の九州大学へ進学するのですが、この進学についても師匠の伊東静雄の勧めがありました。文学をやっていくのであれば、閑暇が必

要である、暇な時間がとてもたくさん必要だと、伊東は庄野に大学進学を勧めます。はじめは、東北大学と九州大学で迷っていたのですが、大阪のような気候の良いところで育った庄野が、寒い東北へ行って身体を壊してはいけなないと、九州大学へ行くことを勧めます。伊東の出身は長崎県の諫早ですが、福岡が自分の故郷の近くであることも九州大学を勧めた理由のひとつでもあったようです。こうして庄野は九州大学へ進学し、大阪の実家を出て福岡で下宿生活をはじめました。

専攻は東洋史でしたが、一級上には後に作家となり、『死の棘』などを書いた島尾敏雄がいました。お互いに作家志望ということもあって、戦時下の福岡の町で頻繁に下宿を行き来するというような深い友情を結んでいました。この大学時代のことは、後に庄野が書いた「前途」という小説の中にとっても詳しく書かれておりますので、興味のある方は読んでいただけたらと思います。



こちらは伊東静雄と庄野潤三の写真です。昭和十八年頃、庄野が軍隊に入隊する直前に撮られたものです。

庄野潤三 略年譜

- 処女作「雪・ほたる」を『まほろば』に発表
- 戦後、島尾・林・三島由紀夫らと『光耀』創刊
- 『文学雑誌』・『VIKING』などに参加

されました。この『まほろば』という雑誌は、後に文芸評論家となった林富士馬が中心になって当時発行していた同人雑誌です。

こういったつながりもありまして、戦後いち早く、大学で知り合った島尾敏雄、それからこの『まほろば』の林富士馬、その林を通して知り合った三島由紀夫らと、同人雑誌の『光耀』を創刊しました。文学を、戦争が終わっていち早くやっつけようという熱意に燃えて作

伊東静雄の影響もあって文学を志すようになって庄野は、大学生になってから小説を書くようと試行錯誤しますが、今の写真の、入隊直前の時期に「雪・ほたる」という小説を初めて書き上げます。庄野はこの原稿を伊東に預けて軍隊へ入隊していきましたが、その後、「雪・ほたる」は『まほろば』誌上に伊東静雄の推薦の言葉とともに掲載

りました。ところが、当時は印刷費の高騰などがありまして、なかなか続かずに三号までで終わってしまっただけです。しかし、有名な作家が何人も関わっていたので、今でも文学史上に名前を残している雑誌です。『光耀』は三冊で終わってしまいましたけれども、庄野はその後も活発な活動を見せまして、藤沢桓夫が作った『文学雑誌』、あるいは神戸で、後に作家となった富士正晴が作った『YUKING』といった雑誌、そういったところに参加、あるいは寄稿をして、積極的に短編小説等を発表していきます。



こちらは、先ほどお話ししました「雪・ほたる」という小説を載せた、その掲載誌です。文学冊子『まほろば』という題字があり、その下に小さく「昭和十九年六月 終刊号」と印刷されています。戦時下にいろいろと工面して発行を続けていましたが、この号が最後となりました。

庄野潤三 略年譜

- 復員後すぐ、大阪府立今宮中学校で歴史の教員
- 野球部長となり、甲子園に出場
- 大阪市立南高校へ転勤。その後、朝日放送へ入社。

長になって、なんと甲子園に出場しております。そのためか、当時、野球雑誌の『ベースボール』に庄野はエッセーなどを書いていきます。この今宮中学校で歴史の先生として三年間勤めた後は、大阪市立の南高校へ転勤をし、その後、教員の職を辞して、朝日放送へ入社をします。この朝日放送は、今でもあるあの朝日放送ですけれども、当時はまだテレビ放送ではなく、ラジオ放送でした。庄野はプロデューサーとして番組

戦後すぐに雑誌『光輝』を作った、作家になろうと頑張ったという話をしましたけれども、今度は仕事の話をしませぬ。

庄野は復員後まもなく、大阪府立今宮中学校の先生になります。東洋史を九州大学で専攻していたこともあって、歴史を教えます。そして、これはちよつと文学とは関係ないので脱線しますが、学生に請われて野球部の部長に請われております。

作りに関わっていきます。ここで出会ったのが、後に作家になる阪田寛夫です。阪田寛夫は帝塚山学院小学校の後輩にあたる人で、これを機に友情を深めて、生涯の付き合いを結んでいきます。

庄野潤三 略年譜

- 昭和24年「愛撫」「舞踏」で文壇デビュー(28歳)
- 昭和28年 上京、石神井公園へ
- 昭和30年「プールサイド小景」で芥川賞受賞(34歳)

に、朝日放送の東京支社への転勤の話が生まれ、これを機に上京をします。練馬区の石神井公園、今も西

昭和二十四年にはよい文壇デビューを果たします。二八歳のころでした。「愛撫」や「舞踏」といった作品によって作家として出発します。以後、次々に短編小説を発表して、「喪服」「恋文」などの作品で芥川賞候補にもなります。この時期、上京をして作家として本格的に立っていきたいというふうに考えはじめますが、ちよつどそのころ

武池袋線に石神井公園という駅がありますけれども、その近くに家を建てて、引越しをしていきます。ご存じの方も多いと思いますが、庄野はこの石神井公園へ移ってほとんどなくして書いた「プールサイド小景」という作品で芥川賞を受賞しました。



庄野が芥川賞を受賞した昭和三十年前後に相次いで出てきた新人たちを指して「第三の新人」という呼び方をしますが、そのメンバーたちと一緒に銀座で撮った写真です。「第三の新人」というのは第一次、第二次戦後派の作家たちに続いて、三番目に出てきたというような意味で使われる言葉ですけれども、最初は山本健吉が編集部の求めに応じてこの言葉を

使い、いつのまにか定着していったものです。写真は、左から吉行淳之介、遠藤周作、近藤啓太郎、庄野潤三、安岡章太郎、小島信夫です。

庄野潤三 略年譜

- 昭和36年 神奈川県川崎市生田へ(40歳)
- 昭和41年 『夕べの雲』で読売文学賞受賞
- 以後、生田の丘の上の家を主な作品の舞台とした

石神井公園には七年ほど住み、四〇歳のとき、昭和三十六年にもう一度引越しをします。神奈川県川崎市市の生田というところで、ここが庄野の終の棲家となります。ここでの生活を書いた「夕べの雲」という作品が、最初は新聞連載の形で発表され、後に本になって、読売文学賞を受賞します。この生田の家は多摩丘陵の丘の上にある一軒家なのですが、これ以後ずっと、その丘の上を舞台に、四〇数年間に渡って作品を発表していきます。

庄野潤三 略年譜

- 平成7年 「貝がらと海の音」連載開始(74歳)
- 平成18年 脳梗塞で倒れ、その後自宅にてリハビリ
- 平成21年9月21日、老衰のため死去(88歳)

そして平成七年に「貝がらと海の音」の連載をはじめます。七四歳のころです。庄野潤三は晩年に、雑誌に連載をした作品を本にまとめるという形で、一年に一冊のサイクルで本を出していきまふ。これが全部で一二冊あつて「晩年の連作」と呼ばれているのですが、この「貝がらと海の音」はそれらの作品群の一番はじめの作品にあたりまふ。これが若い女性などにも好評で、人気を博したわけです。

平成十八年、庄野は脳梗塞で倒れ、その後、家族総出でリハビリを続けていましたが、平成二十一年の九月二一日に老衰のために亡くなりました。八八歳でした。

庄野が亡くなった七年前、私はまだ学生でした。ちようど最初にお話した博士論文を書いていて、提出

間際という状況でした。いつか自分が書いたものを持って行って、こんなもの書きましたと言つて、お会いできたらなという気持ちで頑張つて書いていたわけです。ところが亡くなったということを知つて、呆然としました。生田にある春秋苑という場所でお別れ会があることを知つて、そこに参加をしました。会場から外を見ていたら、庄野の家のある丘が向かい側に見えました。ああ、いま自分がいるのはちようど向かい側の丘なのだ、ほんやりと思つたことが、なぜだかいまでもよく思い出されます。

主要作品大別

帝塚山
・昭和24年「愛撫」で文壇デビュー
・昭和28年「喪服」「恋文」が芥川賞候補

石神井
・昭和30年「プールサイド小景」で芥川賞
・昭和35年「静物」で新潮社文学賞

生田
・昭和41年「タベの雲」で読売文学賞
・平成7年「貝がらと海の音」連載開始

ここまでざっと、本当に簡単にですが、年譜的な部分をお話しさせていただきました。ここからは文学的特徴を、それもごく一般的な庄野文学の特徴をお話ししたいと思います。こちらも大きく三つに分けました。一番目は、上京するまで。帝塚山に住んでいた時代です。それから、続いて石神井公園に住んでいた時代。そして、最後の生田に住んだ時代ということで、三つに分けてご説明していきます。

帝塚山

- ・「愛撫」・「舞踏」
- ・夫婦小説
- ・家庭の危機

ばかりの若い夫婦の生活、あるいはまだ小さな子が一人いるぐらいの若い夫婦の話というのがメインに描かれます。一見うまくいっているように見える家庭生活、夫婦生活の底に実は潜んでいる危機が、たまにふっと顔をのぞかせる。あるいは不安の影とか、そういったものがあるとき急に姿を現す。そういった様子を象徴的に、上手に描いたということで、評価されて庄野は文壇に出ていきます。

最初の時代です。帝塚山に住んでいたころ。昭和二十年、戦争が終わって帰ってきて、すぐ作家になろうとして作品を書いていくわけですけども、先ほどお話ししましたように、「愛撫」あるいは「舞踏」という作品で文壇デビューを果たします。この時期の代表作は、やはりいま挙げた二作だろうと思います。この時期は、まだ結婚した

石神井公園

- ・「プールサイド小景」・「静物」
- ・夫婦小説の達成
- ・家庭小説への移行・模索の期間

移行期であるとも言えます。家庭の危機とか、あるいは不安の影とか、そういういたものはだんだんと薄らいで、やがて消えていきます。その後は、日常のささやかだけれどすてきな、穏やかな生活が主な題材になります。それを大ざっぱに家庭小説というふうに言うとしても、ちょうどその夫婦小説の達成の時期と、家庭小説への移行、あるいは模索の期間、両方がグラデーションのように同時にあり、少しずつ移っていく。

続いて石神井公園時代です。芥川賞を受賞した

「プールサイド小景」、あるいはファンの方も多いかと思いますが、「静物」という作品ですね。この二作が代表作だと言えます。この時期は、先ほど帝塚山時代は夫婦小説を書いていたとお話ししましたけれども、その達成の時期であると位置付けることができます。同時に、この後の作風への

石神井公園時代はそんな時期だったと考えられます。

生田

- ・「夕べの雲」
- ・庭木のこと・野鳥のこと・家族のことなど
- ・晩年の連作、庄野文学の成熟と達成

夫婦小説から家庭小説へと移っていくという話をしました。常のみを描くようになっていくという話をしました。実際にこの時期にどんなことを書いているかといいますと、家を中心に庭木のことや庭を訪れる野鳥のこと、あるいは家族のこと。そうした日常の出来事。それを

最後に生田の時代です。後から振り返って、庄野潤三の文学全体から見ますと、このころが結局は一番期間が長く、やはり庄野文学の代表的な作品が発表された時期だと言えます。この時期の代表作を一つに絞るのは難しいですが、「夕べの雲」が名作としても名高いですし、読んでいる方も多いのではないのでしょうか。先ほど庄野文学は

丹念に書いていくというような作風へと移っていきま
す。そんな庄野文学の成熟と達成が、「貝がらと海の音」
にはじまる「晩年の連作」の一二作です。



も幸せそうない写真です。多くの読者も感じるとこ
ろでしょうが、これが私の考える庄野文学を象徴する
写真だと思います。

ここまで、庄野潤三の
人生と文学的特徴をお話
しさせていただきました
が、続いては、最初に
説明しましたとおり、私
が考える庄野文学の特色
についてお話ししたいと
思います。この写真は平
成十二年、七九歳ごろの
写真です。庄野家ではお
正月にこうやって集まっ
て、みんなでお祝いをす
るといことが恒例にな
っていたのですが、とて

人間賛歌の文学

- 人生の暗部を書かない
- 人生の光の部分を見つめ、言葉で紡いでいく

非常に大ざっぱな言い方ですが、仮に人生に光の部分
と闇の部分というのがあったら、そういった闇の
部分を書くことを、文学は得意としてきました。人の
孤独とかつらさとか苦しさとか、あるいは親子の葛藤
とか確執、そういったことを題材とするのは近代以降
の文学の得意としてきたところで、実際に多くの
作品があります。ところが、庄野潤三は、そういう闇
の部分というか暗部、人生の暗部、そこをあえて見な

庄野潤三の文学につい
て誰かに話しをするとき
に、まず何から話そうと
いうことをいつも悩みま
す。スライドに「人間賛
歌の文学」とありますが、
いろいろと悩んだ末に、
やっぱり最後はここに行
き着いてしまいます。こ
れが、やはり最も大きな
特徴であろうと思いま
す。どういふことかとい
いますと、人生の暗部を
書かないということです。

いようにして、人生の光の部分、すてきだと思える部分ですね。人間のいいところとか、そういったものを懸命に見つめて、それを言葉で紡いでいくというような作家でした。私が庄野潤三の文学について語るときは、いつも一番にこの「人間賛歌の文学」を掲げるのは、やはりこういう作家や作品を、非常に稀有な存在だと考えているからです。実際に人は生きていると、つらいこととか苦しいこと、たくさんありますよね。私も身もそうですし、皆さん、この会場にいらして居る方も、もちろんたくさん経験されていると思います。人間生きていけば苦しいし孤独です。だからこそ、つらいこととかを、あんまり読みたくないという気持ちがある。せつかく小説を読むのであれば、人生の暗部をまじまじと見つめるのではなく、その小説を読むことによって世界が輝いて見えるような、そんな小説を読みたいたいというふうに思ったところから、私はだんだんと庄野文学に惹かれていきました。

人間賛歌の文学

- 喜びの種子
- 嫌なことから身を逃らす姿勢
- 生き方でもあるが、文学・芸術上の努力

いまお話しましたように、庄野は光の部分を見つめる作家なのですが、これから幾つかの具体的な文章を通して、もう少し掘り下げていきます。「喜びの種子」という言葉が出てくる文章があります。まずこれをご紹介します。

世の中生きている間には、いやなことやグチをこぼしたくなることも多いが、言っても仕方ないことは言わない。それより、どんな小さなことであれ、喜びの種子になるものを少しでも多く見つけて、それをたたえる。そのことによって生きる喜びを与えられ、元気づけられる。そういう生き方をしたいと思ってやってきました。(庄野潤三「喜びの種子を見つけて」《『誕生日のラムケーキ』所収》)

喜びの種子を見つけて、それをたたえる、そんな生き方をしたい。庄野はこの文章にあるような積極的な喜びの種、つまり人生の光の部分をつかみに行く側面と、それからもう一つの、別の側面を合わせ持っています。それがスライドの二行目にある「嫌なことから身を逸らす姿勢」です。あえて人生の暗部を見ないようにして、身を逸らしていくことですが、これがうかがえる文章がありますので、それもご紹介します。講談社文芸文庫版『鳥の水浴び』の解説からの引用です。田村文さんという新聞記者の方が、かつて庄野潤三にインタビューをしたときのことを振り返って書いた文章です。

「小説に『ありがとう』『うれしい』『よかった』という言葉が何度も出てきますね」と言うと「そういう気持ちを持って生きているんでしょね」と、やや客観的に答えた後、自らの内面に入る。「誰にともなくね、ありがとう、と。うれしい、よかった、と。それ以外の悲観的なことは、口にしないわけです。もう駄目だ、とか、そういうことは一切言わない。たとえ心に浮かんでも、無視するわけです」「世の中には嫌なことがいっぱい

ある。そうしたことから身を逸らすんです。社会的な事件でもね、嫌だなと思うことは、そりゃいっぱいありますけどね。それは取り上げない。自分の庭に来る鳥のこととか、庭に咲いた花のこととか、自分を喜ばせてくれることだけを書く。そういう姿勢を貫いているんです」（解説 田村文「庭の時間」《講談社文芸文庫版『鳥の水浴び』所収》）

庄野は生き方として、このような両側面のことを一つにしたもの、一つのことの裏表ですけれども、そんな姿勢を生き方として持っていた。それと同時に、これは文学、芸術上の努力でもあったのだろうと思えます。それも非常な覚悟が要る。覚悟と努力ですね。私も研究者として、庄野の文学にいつも触れているので、彼が目指したような生き方をしたと思うったり、そんな作品を書きたいというふうに思ったりもしますが、それはやはり、思ったり、言うほど簡単なことではなく、しかもそれを一生継続するというのは、相当なことではなかったかというふうに感じます。

人間賛歌の文学

- ・ウィリアム・サロウヤン
- ・「君が人生の時」—人生肯定の作家
- ・若い頃から人間賛歌の文学への理想を抱いていた

になった直後、「愛撫」でデビューした一年後ぐらいに、新聞にこの「君が人生の時」を評した文章を発表しています。「君が人生の時」という作品のタイトルに、「人生肯定の作家サロウヤン」という副題を付けています。

サロウヤンという作家に取つては、生きることがすべての人間の悦びであり法則でなければならぬ。しかも現実の世界は暗いもの、醜いもの、

そんな庄野の生き方と、文学上の覚悟、その両方を示し、また両方が若いころから彼の中で芽生えていたのだということを示す幾つかの資料をご紹介します。『我が名はアラム』などを書いたウィリアム・サロウヤンというアメリカの作家がおりますが、この作家に「君が人生の時」という戯曲があります。庄野は、作家

不幸なるものに満ちている。これは、何か、何処かに悪いところがあるからだ。正しく健康なものが圧迫され、愚劣で不健康なものが栄えているのである。これは世の歪みである。これを正すものは、政治家でも軍人でもなく、ただ芸術家のみである。——というのが、サロウヤンの思想の根底にあるように見える。（「君が人生の時」—人生肯定の作家・サロウヤン——昭和二五年六月三十日「夕刊新大阪新聞」）

ある作家が、他の作家を評することによって、それが翻って、自分自身の文学観を語ることになっているというのは、よくあることではありませんけれども、これもその一例だと思います。庄野は、こういうふうに若いときに書いているわけですが、先ほどの二つの引用文、「喜びの種子」と「嫌なことから身を逸らす姿勢」についての文章と読み比べると、庄野潤三の文学観とこの今のサロウヤンについての文章とが、いかにつながっているかが分かります。そして、それが生き方であると同時に、ただ喜びの種を集めるということではなく、集めたことによって、世の中が少しでもよくなるという願う芸術上の努力だったということ

が、うかがえるのではないでしょうか。

理想の場所づくり

- 喜びの種を集めていく場所
- 身近な家庭・家族を中心としたひろがり
- 言葉、文章上の場所だが、実人生とも連動している

の種、これを見つけて、それをまいて育てる場所ですね。庄野はこれをつくろうとしました。そういう場所づくりを意識的にしたのではないかと、私は考えています。自分自身が喜びだと思えるものをたくさんたくさん集めた場所を形づくることによって、それがやが

ここまで、庄野潤三は人間賛歌の文学を目指して、若いころから自身の文学の道を進み、あるいは探ってきたという話をしてきました。では、実際にそれをかなえるために、どのようなことをしたかという話をしたいと思います。スライドの一番上のタイトルに「理想の場所づくり」とあります。先ほどから繰り返して言うている、喜び

て理想の場所になっていくわけですから。どんな場所かといいますが、それは身近な家族を中心とした家、家庭生活、そんなところに、自分の理想の場所をつくろうとしました。これが実生活上でもそうでしたが、それだけでなく、さらに文学、言葉、文章上の場所でもあったと。どちらもが、共に連動して育っていくというふうなつくられ方をしていきました。

理想の場所づくり

- 樹木、草花、野鳥など自然を身近なものとして暮らす
- 人の営みと自然の営みとがひとつに溶け合った生活
- そうした場所をつくり、喜びの種子を集め、育てた

庄野潤三といえば、庭がとても有名です。特徴的というか、庄野文学の場所といえば庭。お庭のすてきさが、やっぱり一番に浮かぶことかと思えます。そんな庭に植えられた樹木とか、あるいは草花、四季折々の庭にやってくる野鳥とか、そんな自然を身近なものとして暮らす。その暮らしそのものが、理想の場所に

なるようにということ、つくられていきました。それは、人の営みと自然の営みとが一つに溶け合うような、そんな暮らしぶりですね。そうした場所をつくって、そこに喜びの種を多く、少しでも多く見つけて育てようというふうにしていたわけです。



これからご紹介する資料は、公の場に出るのは恐らくこれが初めてだと思います。野鳥が来て、四季折々の草花が咲いて、といった庄野の理想的な場所の在り方のルーツを示すような資料です。何かと書いてあります、「詩集」と書いてありますが、これは庄野潤三が小学校六年生のときに作ったものです。手書きの原稿用紙を綴じ合わせてできています。もしかし

たら初めての詩集だったかもしれないですね。一八の詩と、一部作文から成っています、この中に「大自然の楽園」という詩があります。



大自然の楽園

木が青空にのび／＼とそびえている。
草が一面に茂っている。

花が咲きほこっている。

向に緑の湖水が横はっている。

小鳥が幸福そうにさびづっている。

楽園だ!! 自由だ!! 大自然だ!!

(完)

(庄野潤三の小学生時代の『詩集』)

「大自然の楽園」をイメージするときに、こんな光景を思い浮かべるわけです。小学校六年生で既に、「楽園」にはこんなふうの小鳥がいて、木々があつてと、そんなイメージを庄野が持っていたことを示す資料です。

ここで皆さんにご紹介したい詩がもう一つあります。少し脱線しますし、時間の関係で本当は取り上げないつもりだったのですが、やっぱりお話しします。

庄野潤三には三歳下に四郎という弟がいました。この四郎は幼くして、疫痢にかかって二日間苦しんだ末に亡くなってしまいます。潤三が当時六歳で、四郎が三歳でした。すぐ下の弟ですので、とてもなついて、あちこち連れ回っていた。かわいがっていた弟でした。この弟のことを書いた詩があります。六歳のころに亡くなって、この詩集がつくられたのが小学校六年生な

ので一二歳ぐらいでしょうか。六年ぐらいたつてから書いた詩です。「夢」という題名です。

夢

昨夜見た夢

弟の夢。笑って死んだ弟の夢

夢の中でびんぴんして飛び廻って、僕と遊んでいた弟。やっぱり弟は死んでいたのだ。

(庄野潤三の小学生時代の『詩集』)

こんな詩を書いたのは、それだけ長く弟のことを気にかけていたということもあったんですが、私が今回ご紹介したのは、この「笑って死んだ弟の夢」という表現に驚いたからです。六歳で弟の死に接した少年が、その六年後に、弟のことを「笑って死んだ」という言葉で表現している。こんな言葉が出てくるものなのかという驚きです。少し大げさな言い方もかもしれませんが、文学的な才能の萌芽を見ることができるような、そんな詩だなと思ったもので、ご紹介させていただきます。

根づきの実践

- 「夕べの雲」の大浦一家
- 多摩丘陵のひとつの丘の上
- 周囲にさえぎるものがない

ちよつと話が脱線したので戻します。ここまで、庄野は人間賛歌の文学を目指し、理想の場所づくりに励んだという話をしてきました。その場所づくりをどのようにしたかということについて、これからお話ししていきます。

喜びの種をまいて集めたような、そんな、人間が豊かに生きることのできる、そういう場所をつ

くるためには、例えば大きな木が地中に深く根を張って己の存在を安定させているように、我々人間も、ある場所をつくるときには、そこに深く根づいていく必要があるのだと思います。そんな存在の根拠たる場所づくりを目指して、庄野は根づきの実践をしていきます。先ほど出てきた「夕べの雲」という作品が、この根づきの実践の一番はじめの作品であろうと、私は考えております。「夕べの雲」は庄野とその家族の実際

の生活がモデルになってはいるのですが、作中では、大浦という名前で主人公が出てきます。これから引用するのは、主人公大浦の場所に根づこうとする意思を読み取ることができる文章です。

ひとところに暮らしていると、長い年月の間でそこではいちばん住みよいようにあらゆる努力をしているものだ。そうして、うまく行かないことは目立つが、うまく行っていることというのは案外、目立たない。それらは、一日にして成ったことではなくて、木のひげ根が邪魔になる石をよけたり、ほかの木の根の間をくぐったりして、何とか都合をつけて、水と養分を送っているようなもので、掘り起してみてもそんなことは分らない。

家を引越すということは、こういうひげ根をすつかり断ち切られるのと同じで、そこがづらいところだ。しかし、そんなことをいつても始まらない。ここへ引越して来たのは、やはり引越して来るだけの何かがあったからなので、それはやっぱり縁があったということではないだろうか。それなら、前のひげ根のことは思わず、ここで少しでも早くひげ根を下すことを考えた方がいい。(庄

野潤三『夕べの雲』

ここではひげ根という言い方をしていますが、早くこの場所に根を下ろして、豊かな場所にしていきたいという願いが読み取れると思います。このように「夕べの雲」は、根づきの実践そのものを描いた根づきの物語だととらえることができます。そこを、これからもう少し掘り下げて見ていきます。



この大浦一家は、庄野の実生活でも同じですが、多摩丘陵の丘の上に家を建てます。実はここは、周囲に遮るものが何もないような場所だったわけです。ちょっと写真がありますので、ご覧ください。これですね。ちよと建て始めたばかりのころです。昭和三十六年です。本当に、山のてっぺんみたいなところなわけですけれども、周りに何もないことが分かります。



続いての写真は、さらにその二年後です。もう越してからでしょうが、昭和三十八年。当時の多摩丘陵というのは、こんなにも自然豊かな場所だったのだというところが、私などまだ生まれていないころですから、ちよつと意外に思います。高度経済成長期なので、この後だんだんとこれらの多摩の山々は切り崩されて、団地や住宅が建っていきます。



こちらの写真もそうですね。当時の自然豊かな様子がわかります。

根づきの実践

- 風よけの木を植える
- 道を見つけ、名づける
- 日常の反復一ささやかだが具体的な出来事
- 草花を育てる一四季を取りいれる

いる人々を見てみると、そんなところに家を建てる人は一人もいない。そうした描写があるのですが、それがまた、彼ら家族がこの場所にまだ根づけていない、場所との関係がまだよそよそしいという、そんな関係性を象徴した描写として受け取ることができます。小説のなかだけの話ではなくて、実際にもそういうところに家を建てたわけですが、では、どのような方法で彼らがこの場所に根づいていったかということ、こ

彼らは丘のてっぺんに家を建ててしまったものだから、遮るものがないので、風が吹くと吹きさらしになってしまいます。守るものがないわけですね。例えば台風が来たりすると、家はもろに風に当たってしまいきます。あるいは、山のてっぺんなので、雷が夜中に落ちてくるということもあります。周りの農家とか、昔からそこに住んで

れからお話ししているかと思えます。

スライドにあるように四つの項目に分けてあります。それぞれに独立しているのではなく、互いに関わりあっていることで、完全に分けることはできないということとを念頭に置いてお聞きください。彼らはまず、風よけの木を植えました。先ほどからお話ししているように、風がもろに当たりますので、それを防ぐための木を植えなければいけなかったわけですね。安心して暮らすための方策ですね。なので、植木屋さんに頼んで植えてもらう。ところがあまりにも風が当たるもので、この風よけの木の根すら、なかなか根づかない。それでもなんとか少しずつ根づかせていき、一応風よけの木が植わっていきます。

それ以外にどんなことをしたかということ、例えば道を見つけて名前をつける。先ほどの写真を見ていただいたら分かりますが、あれだけの山のなかですから、道なき道もあつたでしょうし、思わぬところに道を見つけるといふようなこともあります。暮らしのなかで出会った道に名前をつけていくわけですね。S字の道とか、学校の道とか、真ん中の道とか、そんなふうにして名前をつけます。私たちが普段生活しているときに、愛情を注ぐ存在とか、物でも生き物でも、どんなもの

でもいいですけども、名前をつけたりしますね。そうやって愛着を育てていく、親しんでいくということがあります。これもそういったことの一つだと考えていただければ分かりやすいかと思います。この場所に親しみ、根づいていくための方策の一つだったわけです。

そして三つ目が、日常の反復です。「ささやかだが具体的な出来事」とスライドに書いてありますが、ここにはいままで話していた「名前をつける」ことも、厳密には含まれません。例えば、学校帰りに偶然見つけた木の切り株に腰を下ろして、ちょっと休んでいく。毎日そこで休んで帰るうちに、いつかそこがお気に入り入りの場所になっていく。名前をつけたりもする。あるいは、いつも遊び場にする垂れさがった枝があるとか。繰り返し、日常生活のなかで反復を行うことによって、よりそこが自分自身の身近な存在になっていくということが私たちの生活でもあります。これは晩年の話になりますが、例えば、庄野家には仏壇がなくて、かわりにピアノの上に亡くなった親の写真や友人の写真を置いて、そこに毎日手を合わせます。仏壇のかわりにピアノの上にお参りをする。そうした日々の繰り返しを何年も続けていくことによって、そこが、そのピ

アの上が、やがて本物の祈りの場所になっていく。なぜとは説明しにくいですが、少なくとも小説のなかでは、祈りの場所として違和感なくなじんでいきます。もちろん小説だけではなく、私たちの生活に照らし合わせてみても似たようなことがあるはず。繰り返しにはそんな場所を形づくる力があると思います。

最後、草花を育てる、四季を取り入れるという項目についてお話しします。これは風よけの木を植えて少し余裕が出てくると、今度はもっと理想の場所に近づくようにと、四季折々の草花を植えます。それにとってもなあって、そこに集まってくる野鳥もふえていきます。そういう理想により近づけていくような意味で、根づきの実践の一つとしてこの項目を挙げました。もっと、いろいろ細かく見ていけばほかにも考えられるはずですが、今回は一応この四項目を主要なものとしてお話ししました。

場所の成熟

- 「貝がらと海の音」にはじまる晩年の連作
- 豊かな場所一経験・記憶・時間・愛着の堆積
- 人と場所と文学とが共に成熟していった

には四〇年分の経験や記憶、愛着の堆積が描かれています。当然、実際に四〇年、その場所を小説に描き続けてきたわけですから、その蓄積の量は言うまでもありません。例えばさかのぼって「夕べの雲」から順を追って作品を読んでいけば、この四〇年分の経験や時間の堆積を肌で感じられるはずです。そして、そこに描かれている場所というのは、人と場所と文学とが互いに影響し合い、共に成熟していったものであるわけ

このように根づきを実践していくわけですが、やがてそこが長い年月のうち、徐々に理想に近づき、成熟していきます。この「夕べの雲」から四〇年近くたってからの「貝がらと海の音」に始まる晩年の連作を読むと、同じ日常生活を題材としながらも、明らかに「夕べの雲」のころとは違うものが描かれていることが分かります。そこ

です。人が場所に働きかけ、場所が人に働きかける。そうした営みをさらに言葉で紡いでいく。庄野はそんな関係性を築き、長い年月をかけて成熟させていったというふうに考えられます。

場所の成熟

- 庭に四季折々の草花が咲き、様々な野鳥が訪れる
- 場所に根づき、やすらぎの中で暮らす老夫婦の姿
- 主人公「私」の言葉なのか、その場所の言葉なのか

らぎと安心の中で暮らしている。穏やかな日々という
ようなものが、非常に深い姿として描かれています。
例えば庄野の小説には語り手である「私」が、庭木や
野鳥のことなどを描く合間に時々登場しますが、この
晩年のころになると「私」という言葉が使われること
自体が、もう既に少なくなっています。孫が訪ねてき
て、うれしかった、とか、よかった、ありがとう、と
か、そんな感謝の言葉などがふつと書かれると、それ

そして、今、その成熟した場所がどんなふうになっているかといえますと、これは繰り返しのな
ってしまいますけれども、庭に四季折々の草花が咲
き、さまざまな野鳥が訪れる。そこに暮らす夫婦
は、もう子供たちが大きくなって、孫もいるよう
な老夫婦です。子供たちが家を出ていき、あとへ
残された夫婦が、その場所に深く根づいて、やす

が語り手である「私」の言葉なのか、むしろその場所
自体の言葉であるのかというのが、だんだんと区別が
つかなくなるような、そんな人と場所とが溶け合った
作品になっています。



これは平成十三年ごろに、小説家の江國香織さんと対談をしたときの写真です。江國さんが庄野とで生田の丘の上を訪れます。ここは庄野の書斎ですけれども、この奥のガラス戸の向こう側が、先ほどから話に登場しているお庭です。

場所の成熟

- 江國香織「物語の中に来たみたい」
- 言葉によって現実の世界に物語の磁場を形成
- 庄野潤三が見つけた「喜び」に満ちた理想的な場所

江國さんはこのときに、物語の中に来たみたいだということを言います。短いですがちょっとその一節をご紹介します。

作者にとりより、登場人物に会っているという気持ちが悪くします。まして、お宅まで歩いてきたときの景色とか、お庭の様子とか、脂身のはいったエサ入れを拝見すると、物語の中に来たみたいな。(対談「静かな日々」《新潮文庫版》『ささぎのミミリー』所収)

私は庄野潤三ご本人には生前にお会いすることができませんでしたが、現在、ご縁があってご家族と親しくさせていただいております。何度かお宅にも伺ったことがあります、特に初めてのときなど、やはり江

國さんと同じように、ああ、あの物語の中に来たみたいだなと思いました。探しちゃうわけですね。書かれていたことを思い出して。あ、これは作品のなかに出てくるあの甕だなとか、あれがいつも鳥が水浴びをする水盤だなといったふうに。思い出といつてはおかしいですけども、小説の記憶、物語の記憶が自然と呼び覚まされるわけです。すでに何度も伺っていますが、今でも行くと、やっぱりいろんなことを考えます。

これは、言葉によって現実の世界に物語の磁場がつくられているということだと思います。あくまでも実際の生活とは関係なく文学というのはあって、言葉で語られている世界がある。それが、その言葉の世界が、現実の中に物語の磁場をつくるということ。そこを訪れると、読んでいる者にとってはとても深い磁場になっているということ。これは言葉で軽く言うとうまく伝わらない気がしますが、とにかくすごいことだと思っただけです。なかなかできることではないんじゃないかというふうに、私には思えてならないわけです。

例えば映画のロケ地を訪ねていくことがあります。ある映画をみて、あ、ここがああ場面映っていた場所だとか、そんなふうにしむということもありますけれども、それとはもう比べものにならないも

のですね。何十年も書かれた膨大な量のテキストが、現実の中に磁場として現れているわけですから。この場所をつくったというのが、庄野文学の特徴の一つではないかと思います。そして、しかもその場所というのは、庄野潤三が一つ一つ見つけた、先ほどから言っている喜びに満ちた理想的な場所なわけです。

庄野のように、この幸福ということを本当に考えた作家というのは、なかなかいなかっただろうと思います。喜びということを抽象的に考えることはできて、具体的に一つ一つ拾って行って、それが磁場になるほどに成熟するまで続けたということ。これが本当に、過去を振り返ってみても、庄野潤三以外に果たしているだろうかというような気持ちで、いつも庄野文学に接しております。

そしてこれは、ちよつと脱線するとういか、ここでお話しいいようなことかどうか分かりませんが、けれども、例えば震災がありました。東日本大震災です。あのときに、自分の住む場所を失った人たちがたくさんいましたよね。そういったことがあって、人が暮らす場所との関わり、どのように場所に生き、暮らし、根づき、関係を結んでいくのかということが、実はすごく重要なことだったんじゃないかということを、再

確認というか、もう一度みんなで、そこを考え直す、そんなふうな機会になったと思いますし、かつ庄野潤三という作家が、生涯をかけた文学というのが、いかに意味のあることだったか、そして我々にとって重要な示唆に富んでいるかということ、そんな思いを強くし、今もまた感じております。



ここまで庄野潤三の文学の魅力をお話しさせていただきました。いただきましたが、最後に、三番目の「庄野文学と帝塚山」についてお話しいていきます。本日は帝塚山学院創立一〇〇周年記念の講演会です。この帝塚山との関係についても触れる必要があると思いますし、それがなくても、非常に大切なことですので、お話をしてい

きたいと思います。

こちらの写真は、外語のころ、大阪外語に通っていたころの家族写真です。お兄さんと一緒に写っております。

庄野潤三にとっての故郷＝帝塚山とは

- 上京によって故郷を意識する
- 望郷の詩人と言われる伊東静雄の影響
- 根なし草の意識

返って対話していく、そんな場所として考えられるわけです。

それでは、庄野潤三にとっての故郷である帝塚山とは何かということを考えていきたいとします。作家にとって故郷というのは、とても大切な場所です。言うまでもないかもしれませんが、自分自身のルーツでも、多くの場合、文学の源泉でもあるわけです。文学者にとって故郷は作品を紡いでいく上での土台であり、常に立ち

この文学をやっていく上での故郷の重要性というのは、庄野も当然認識をしておりました。強く感じるのは上京以後のことなのですが、彼が故郷の重要性を知っていたということが分かる資料を紹介したいと思います。伊東静雄は、望郷の詩人といわれるほど、故郷である諫早の土地、あるいは有明海という場所を自分自身の詩の源泉としたというふうにいわれています。その影響もあつて、そばにいた弟子である庄野も故郷の重要性は認識していました。これは庄野が、後に伊東静雄の詩を振り返って書いている文章です。

子供の時から有明海のそばで大きくなって、この海に対して或る特別な魅惑を覚えている若者が、ふるさとを遠く離れて、言葉も気風もまるきり違う大阪のような町へ来て、ごみごみした、小さな貧しい家がひしめき合っているようなところで生活を始めれば、それだけでも、いつか、この詩（引用者注「漂白」のこと）の中の一行なり二行なりが、心にくくと浮かぶことがあるかも知れない。

（中略）

そうして、この場合、単なる望郷の思いが、作品を生み出すわけのものではないということも分

る。(中略) 異常な、切迫した、息苦しいものがあって、逃れる場所がない、といった精神生活から生まれたのであろう。

ただその際、伊東静雄の中の「有明海」が力をかしてくるのである。谷間で大きくなった井伏鱒二は、東京に暮して「思いぞ屈して」いる時に、いつも自分の胸の中に「谷間」の景色を見失わないで、それによって作品をつくり出そうとしたように、有明海のそばで大きくなった伊東静雄は、大阪の露地裏の家にあつて、「有明海」にその詩の源泉を求めたのかも知れない。(庄野潤三「漂白」《伊東静雄研究》所収)

と、こんなふうに言っております。ところが、庄野自身は自分の故郷についてよそよそしい感覚、根なし草の意識といったものを持っているのではないかと思える文章を残しています。続けてご紹介します。

私は大阪で生まれたが、家があつたところは名前は市内でも南のはずれの方で、大阪らしい空気の濃い市中の生活を知らずに大きくなった。(中略) もし私が町なかに住んでいたら、もっと早く、

もっと上手に大阪風な言葉をしゃべり、大阪風の感覚を身につけるようになったらと思う。今でも私は、大阪の風習や言葉で知らないことがいっぱいある。

よく知らないままに東京へ来て住むようになったので、結局どこのこともよく知らず、自分は浮き草のようなものだと思うことがある。(庄野潤三「帝塚山界限」《庄野潤三全集第十卷》所収)

ここでは根なし草ではなく、浮き草という言い方をしておりますけれども、自分にはルーツとなる場所がないのではないかと書いてあります。もちろん本当はそうではなくて、これはいわゆる大阪らしい大阪と言ったときの故郷と比較したときのことを言っています。

庄野潤三にとっての故郷＝帝塚山とは

- ・故郷＝帝塚山＝父・貞一のつくった新しい町(場所)
- ・「桃李」・「伯林日記」の重要性
- ・作品を送り出すべき私のドック→貞一の精神の水脈

庄野にとっての故郷というのは、大阪ではなく帝塚山です。それは父貞一、正確には貞一達でつくった、新しい、帝塚山学院という学校を含む帝塚山の町自体が、故郷であると。大正時代につくられた郊外型の住宅地ですね。それ故、いわゆる大阪らしい大阪というのは、またちよつと違う場所なんだということです。

貞一がつくった新しい場所である帝塚山という町。もちろん貞一だけでつくった町ではありませんが、彼は町の中心的存在である帝塚山学院の初代学院長でした。そして教育に対して自分なりの理想を持ち、その理想の実現を目指して、学校の教育方針を作り、学校を造り、町と関わっていった。このような意味で帝塚山は、貞一の精神性が深く浸透している場所だと言えます。そして、そこで育った庄野にとっては、その父

親の精神性こそが故郷だという認識があったようです。それが分かる作品がスライドの二行目にある「桃李」と「伯林日記」です。これらの作品は、東京へ行って暮らすようになったところに書かれたものです。三〇数年間暮らした帝塚山を離れ、そこに下ろしていた根を断ち切って、東京で新しい根を下ろそうとしていた時期に、やはり自分の根っこというのが気になったんでしょうね。いろいろと模索をして、その模索の跡を作品に残しているわけです。今この場で、いろいろと後付けて具体的にみていくことはできませんので、結論だけ申しますと、これは父親の貞一の理想とか精神性といったものが、自分自身の中にも受け継がれているということ振り返るために書かれたものです。あるいはそれを自覚したということを表現するために書かれた作品だと言えます。庄野は自分で、この二つの作品について、それ以後の作品を送り出すべき私のドックだという文章を残しています。ということは、つまり自分自身の作品の土台であると。この受け継いだ父の精神性から出発して、今後自分は作品を書いていくのだということ。貞一の精神の水脈が、自分自身のルーツであろうと見定めたということが言えるのではないかと思います。

庄野貞一について

・明治20年4月 徳島県名西郡上分上山村字江田に生まれる(現 神山町上分字江田)

・父・田中光三郎、母・マスの次男

そこで、この庄野貞一という人物について、少し具体的にご紹介していきます。必要があるだろうと思います。そして最終的には彼の精神性についても掘り下げていきたいと思っています。それではまず、庄野貞一の人生についてです。

貞一は、明治二十年に徳島市から四〇キロほど離れた山間の、現在の神山町、当時の上分上山村字江田に生まれます。父親は田中光三郎、母親はマスで、次男でした。後に庄野貞一は養子に入りますので、もともとは田中貞一という名前でした。



こちらの写真は、私が実際に八年ほど前に、この江田の地を訪れたときに撮ったものです。

庄野貞一について

- 『庄野貞一先生追想録』
- 本好きの勉強家
- 健康に恵まれ、明るく快活

します。

貞一は非常に本が好きで、とても熱心に勉強をする子でした。例えば、畑に野菜を取りに行くときは必ず野菜籠と本を持って、畑のあいだの細い道を、籠を背負って歩きながら読書をしていたそうです。貞一にお風呂をたかせると、いつまでも湧かなかったという話もあります。なぜかという、かまどの前に座って本を読みながらたたくので、いつか本に夢中になって、火

『庄野貞一先生追想録』という項目がスライドにあります。これは貞一が亡くなったあとに帝塚山学院から発行された本です。さまざまに関わりのあった人たちが、貞一を偲んで書いた文章が集められています。この本のなかに、彼の少年時代について書かれた文章がありますので、その中から、当時どんな少年だったかということをご紹介します。

が消えているのにも気付かずに、いつまでも冷たいまま沸かなかったというような、そんなエピソードが残されています。また、本好きの勉強家という、内向的でおとなしい子供だったのかと思われがちですが、そんなことはなくて、健康に恵まれ、明るく快活な少年だったそうです。どんな少年かといいますと、例えば村祭りのときに、率先して踊りの音頭を取ってみんなで踊るとか、あるいは学校の休み時間に車座の中心にいて、本で知ったお話を、身振り手振りを交えて語って聞かせ、みんなの人気者になるという、そんな少年だったようです。

庄野貞一について

- 貞一の後年の心覚えをもとにした年譜
- 友人と毎日川で魚をとったり、梅、柿、ビワの木によく上った
- 一木一草みな知っている。川の小石まで知っている。

『庄野貞一先生追想録』

には年譜が収録されているのですが、これは貞一が大人になってから、心覚えのつもりでノートに取っておいたいろいろなことを、息子である庄野潤三とその弟の至氏とで年譜にまとめものです。その少年時代の項目には、「友人と毎日川で魚をとったり、梅、柿、ビワの木によく上った」とか、「一木一草みな知っている」というようなことが書かれております。これをあえて、大人になってから書き添えたということです。

庄野貞一について

- 阪田寛夫「後の帝塚山学院における教育方針と関わってくるような生い立ちだと思います」
- 理想的な教育を実践していくうえでの指針
- 重要な原体験

これについて、作家の阪田寛夫は、「後の帝塚山学院における教育方針と関わってくるような生い立ちだと思います」と言っています。この少年時代の生活が、後に、理想的な教育を実践していく上での指針になった、重要な原体験であったということですね。一木一草皆知っている、川の小石の一つ一つまで知っているというのは、つまりそれだけ自然に親しんで、よく遊び、その土地に深く根づいていたことを示しているわけです。そんな少年時代を送っていたのを大人になってから振り返って、あえて書いていることが重要だと思います。貞一は目指すべき理想的な教育として、自然の教育、自然と親しむ、そんな教育を考えていました。その根っこが、ルートがここにあるということです。

庄野貞一について

- 徳島中学へ進学
- 日露戦争の徴兵を避けて徳島師範学校へ転校
- リッツンという英国人牧師のもとへ通って英語を学ぶ

この話はまた後で戻りますけれども、先ほどの続き、年譜的な部分です。さっと押さえていきたいと思えます。貞一は江田の地で育つと、両親にお願いして徳島中学校へ進学をしました。これは推測ですが、もしかしたら中学卒業後は大学へも進みたいと本人は望んでいたのかもしれませんが、ところが日露戦争が起きます、家族の心配も

あつて徴兵を避けるために徳島師範学校へ転校をしました。ここで大学への道がとざされたという意味では、一つの挫折であったかもしれませんが、明るい性格の貞一はそんなことにはめげずに、リッツンという英国人牧師の元へ通って、非常に熱心に英語を勉強します。

庄野貞一について

- 『明星』に短歌を投稿し続ける
- 『徳島毎日新聞』に卒業旅行記を連載
- 与謝野鉄幹・晶子を訪問

その一方で、たびたび雑誌『明星』に短歌を投稿するなど、文学的な活動もしております。『徳島毎日新聞』に自分の卒業旅行の旅行記を連載したり、その卒業旅行で東京へ行ったときには、『明星』の与謝野鉄幹、晶子夫妻を訪れたりもしています。

庄野貞一について

- 明治40年(20歳) 上山高等小学校 教頭として赴任
- 明治42年(22歳) 庄野家と養子縁談 春慧と結婚
- 明治43年(23歳) 徳島市新町小学校に転任

師範学校を卒業すると、明治四十年、二十歳のときですが、郷里の上山高等小学校に教頭として赴任をします。このときは、新しい教育方法をどんどん取り入れて、すごく人気のある先生だったそうです。二二歳のときには、先ほど一番はじめに話をしましたけれども、庄野家へ入婿し、庄野貞一となります。さらにその翌年には、徳島市内にある新町小学校に転任をします。

庄野貞一について

- 大正2年(26歳) 文部省中等教員英語科試験検定
- 大正3年(27歳) 山口県の萩中学校に赴任
- 大正5年(29歳) 大阪の桃山中学校へ(浅野校長)

校で、当時校長をしていた浅野勇氏から声を掛けられました。大阪へと移っていきます。これが帝塚山学院の初代学院長になった最初の経緯といえますか、きっかけだと思われま

貞一は、当時難関といわれた、文部省の中等教員英語科試験検定を目指して、二度落ちて、三度目で合格をします。年譜には、この出来事について、自分自身の運命を切り開いた感があると書いてあります。貞一はこの試験に受かったことによって、山口県の萩中学校へ赴任していきます。ここで二年ほど教えるわけですが、大阪の桃山中学

庄野貞一について

- 大正6年(30歳) 帝塚山学院小学部主事に就任
- 昭和2年(40歳) 欧米の教育視察へ
- 昭和25年(63歳) 10月9日狭心症により死去

この浅野勇氏の強い勧めによって、帝塚山学院の初代、小学部主事という言い方をしたそうですが、学院長に就任をします。それが大正六年。三〇歳でした。昭和二年、四〇歳のときには、欧米へ教育視察などにも出ております。そして現在の帝塚山学院の基礎を固め、次々に新しいことをして学校を大きくしていきます。昭和二十五年、六三歳で亡くなります。

庄野貞一について

- 『十八カ国欧米の旅』
- 『戦後に咲く花』(翻訳 シャルル・ルイ・フィリップ)
- 『これからの女性』
- 『学校をつくれ』

貞一はまた幾つか本も出版しております。先ほどの欧米への教育視察時の手記をまとめた『十八カ国欧米の旅』、ものすごく分厚い本ですけれども、こういった本も出しております。その他、やはり英語を勉強していたということもあって、小説の翻訳なども手がけていたようです。

こちらの写真は、大正七年、貞一が校庭で子供たちと話をしている様子ですね。



これは開校当時の校舎の全景です。



庄野貞一について

- 行動力
- 自主自学
- 自らの運命を切り開いていく力強さ

ここまで、年譜をもとに人生をざっと見てきましたが、ちよつとまとめてみますと、庄野貞一という人物、非常に行動力があって、自主自学する人。懸命に勉強をして、自らの運命を切り開いていく。そういう力強さを持った、男らしいというか、そんな人物だったように思われます。

庄野貞一の目指した理想の教育

- 理想家の貞一
- 「帝塚山学院小学部設立趣意書」
- 力の人を作れ

きますが、まずは一番はじめに掲げられている「力の人を作れ」という項目です。

「力の人！」何といふ勇ましい言葉でせうか。力は吾々の理想を表現するに無二の善い言葉です。力の教育！力とは何か。意志の力、情の力、知の力、軀幹の力——広い意味の力の漲つた強い人物、

ここからは、貞一が目指した理想の教育についてお話をしていきたいと思えます。貞一は、しばしば理想家であったといわれております。そんな理想家であった貞一が、帝塚山学院を開設するとき、小学部の設立趣意書というのを書きます。ここに、その教育方針が五項目に分かれて記されています。これからその五項目を順に紹介してい

これこそ吾々が学院の中で鍛へ上げねばならぬ人物なのです。（帝塚山学院小学部設立趣意書）

貞一は自分の運命を切り開いていく力強さがあったということをお話ししましたが、子供時代は快活な、元気な少年であったし、その生い立ちや自身自身の生涯と、この教育方針というのが密接につながっているのが分かると思います。この後の四項目も全て、貞一の生き方と非常に関わってきます。

庄野貞一の目指した理想の教育

- 児童身体の発育
- 英語教授
- 自学主義

そうだったわけですから、これを目指させるというのは当然のことでしょう。それから「英語教授」です。一生懸命勉強して、自分の運命を切り開いたのがまさに英語だったわけですから、これを広く子供たちに教えていこうと。それから最後に「自学主義」です。こちらも自分自身で勉強をして、運命を切り開いた人生でしたから、やっぱり、ただ受け身で教わるということではなく、自分で学ぶということが重要だと考えて

まずは三つです。スライドの上から順に「児童身体の発育」、それから「英語教授」、最後に「自学主義」ですね。これらのどれもが、貞一の今まで見てきた人生から、自然と出てきたような教育方針だということが、ご理解いただけるのではないのでしょうか。「児童身体の発育」は、体が資本であるという考えです。元気で健康な必要があるというのですが、貞一自身が

いたのでしょうか。

庄野貞一の目指した理想の教育

- ・環境の利用
- ・自然に帰る

ということが語られております。帝塚山学院では、こういった理想的な環境を利用して、教育をしていこうということが、わざわざ五項目に掲げられています。この自然に親しむことを理想とした教育方針と、はじめの「力の人を作れ」という方針との二つが、貞一

そして最後、「環境の利用」という項目があります。これはどういうことが書かれているかといいますと、当時、学校が造られるころは、帝塚山学院の周りはまだあまり何もなくて、自然豊かな場所だったわけなんです。とても良い環境であった。そういう豊かな環境の中で、子供たちの心を自然に返してあげられるような、そんな教育が理想だ

とってはもつとも重要だったと考えられます。そのため、この部分をもう少し掘り下げていきたいと思います。

庄野貞一の目指した理想の教育

- ・『十八カ国欧米の旅』
- ・森の学校
- ・「伯林日記」

『十八カ国欧米の旅』という本は先ほどご紹介しましたけれども、ここに、貞一が視察旅行先のベルリンで見た森の学校というのが出てきます。子供たちが森の中で、普通の学業とは別に、プールを造ったり花壇を造ったりしながら、自然に親しんで、土にまみれて生活をしています。そんな光景に貞一が感じ入るとい

う場面が出てきます。私がつて考へてゐた森の学校をここで見たのである。大阪の様な大都市には是非必要である。郊

外電車が発達したから、子供を一時に輸送して郊外で教育する必要がある。吾学院の如きもつまり森の学校であつたのである。(庄野貞一『十八カ国欧米の旅』)

と、こんなふうに書かれております。最初は自然豊かだった帝塚山の地ですが、学校や住宅地の発展にもなつて、どんどん環境が変わつていってしまった。でも、本当はそうじゃなかった。この森の学校みたいなのが、自分の理想だったんだというようなことが語られているわけです。

この手記を元に、息子の庄野潤三は「伯林日記」という小説を書きますが、森の学校の場面は次のように描かれています。

これだぞ、と真野は思った。自分がずっと前から空想していたのは、この森の学校なのだ。大きな都会には、どうしてもこういう学校が必要だ。赤松の林、豊富な太陽の光、土に親しむ教育、学ぶことと働くことと遊びとが一つに融け合っている律動的な生活。十年前に彼が創立した学校も最初はこの森の学校のようなものを頭に置いて建て

られたのだ。しかし、実際は普通の小学校と変らないものになつてしまった。

郊外電車が発達した現在では、子供を一時に輸送して、郊外のこういう環境で教育するようにしたいものだ。たとえば、一週間のうち、いつもどこかの学級が、その母校を遠く離れた松林の中の学舎で寝泊りしているという風にしたい。そこは山に近く、川に近いところがいい。病弱な子供は、そこへ通うことによつて次第に丈夫になるだろう。勉強嫌いの子ども何か熱を入れるものを見つけるかも知れない。そこをコロニー(植民地)という名で呼ぶことにしよう。(庄野潤三「伯林日記」『庄野潤三全集第一巻』所収)

自分の父親のことですし、森の学校を視察して、実際に貞一が帝塚山学院の教育に反映させたことなどを全て見たうえで書いているわけです。だからこれだけ詳しくなっている。ここにある「土に親しむ教育」というところが重要です。



森の学校の写真です。これは『十八カ国欧米の旅』から取ってきた写真なので、ちょっと粗いんですけど、こんな感じですね。

庄野貞一の目指した理想の教育

- 校外学舎 仁川コロニー
- 金剛農園

教育の一環とするというような方策を打ち出します。この仁川コロニーに対する貞一の思いを知るのに、非常に分かりやすいものがあります。

一人木立の中に入って、虫と話をすることができ。一匹の蟻が、一枚の枯葉の下で、いかにに生きているかがわかる。一もとのスミレの花の下で、小さな虫が一つの社会をつくっていることに

貞一は視察旅行から帰ってくると、森の学校にならって、郊外学舎の仁川コロニーをつくりまします。そして子供たちをそこへ連れてきて、先ほどのように理想の教育を施すべく、学院の教育の中に取り入れていくわけです。それ以外にも、土に親しむ教育を目指して、金剛農園という農園を造ります。子供たちに農作業を体験させて、それを

「気づく。一滴の露が、一匹の蟻が、一くれの土が、いかに自然の法則に従って、存在しているかがわかる。」

都市に於いて、赤い灯や青い灯や、目をくらませるネオン燈の、強いそして有害な刺激をうけて、人為的の表面ばかりの、利害を争うばかりの、浮つ調子の生活から、初めて自然の懐にわけ入った者のみが、味わい得る何ものかに、接することができる。林の中に於いて、野の中に於いて、初めて自分自身と、話しあうことができる。しみじみとした気持、魂を自然にぶつつけて、草の心、土の心、木の心、水の心と、話し合うことができる。

〔庄野貞一先生追想録〕

貞一がいかに、仁川コロニーにおける自然に親しむ教育というのを大切にしていたかが、うかがえる良い文章だと思えます。



これが開設当時の仁川コロニーの写真です。



ね。続いて、金剛農園です。農作業をしている様子です

庄野貞一の目指した理想の教育

- 徳島での子供時代が影響か
- 教育上の理想は、貞一の理想の生き方でもある

の考えた教育方針は、教育上の理想であると同時に、自分自身の理想の生き方でもあったんだということが、ここまでお話ししてきたことから分かると思います。

それでは、貞一の目指した理想の教育についてまとめます。最初にお話ししましたように、徳島の豊かな自然の中で、目いっぱい遊び、生活をした、そんな貞一自身の体験が、どうやらその教育方針のルーツになっている。少なくとも影響がとても強いだろうと思われます。そして、自然と親しむという教育方針が特にそうだけれども、彼

貞一から潤三へ受け継がれたもの

- フロンティアスピリット
- 自分の場所の形成
- 自然に親しむ生活

貞一は徳島に生まれて、大阪へ出てきました。自分が育った場所とは全然違うところ、知らない土地で、そこを自分の場所とすべく奮闘したわけです。そういう意味でのフロンティアスピリットですね。同じように、息子の潤三は大阪の帝塚山で育って、この貞一のフロンティアスピリットを受け継いで、その精神を持って東京へ打って出ました。そして生田の丘の上を自分の場所にすべく、貞一と同じように、方法は違いま

貞一の精神性が息子の潤三に受け継がれたという話はすでにしましたが、それでは具体的に何が受け継がれたのか。庄野潤三の人生と、その文学についても前の章でお話ししましたので、それと比較しつつ主に三つに絞って、まとめました。スライドの最初の項目に「フロンティアスピリット」とあります。これはどういうことかといいますと、

すが、奮闘したわけです。そんな力強さ、精神性を受け継いでいただろうと思われまます。

そして二番目、「自分の場所の形成」ですね。今のフロンティアスピリットとも、当然関わってきますが、貞一は帝塚山学院をけん引し、ちょっと大げさに言うと帝塚山の町そのものをつくったわけです。一方息子には、自分の家庭を中心として、自分自身が幸福と思える、喜ばしいと思える、そんな場所をつくった。と同時に、文学、言葉の世界にもそんな自分自身が良いと思える場所をつくった。そういう意味で、自分の場所を形成しようとする精神が、親から子へと受け継がれていったのだろうと思われまます。

そして最後、「自然に親しむ生活」ですが、これはもうご説明するまでもないかもしれません。今までこうやってお話ししてきましたように、貞一は自然に親しむ教育というのを、理想の教育方針として見定めましたし、それを受けて、息子の潤三は、庭を大事にして、そこに、自然と人間とが共に暮らす、そんな豊かな場所をつくろうと目指したわけです。そんな生活を志したわけです。

庄野文学の達成へ

- 「夕べの雲」における根づきの実践、場所づくりへ
- 生田の丘の上＝文学上の磁場
- 幸福な晩年の生活と作品

ないでしようか。

そして受け継がれていったこれら三つのものが、先ほどもお話ししましたように、やがて庄野文学という形で結実をしていきます。振り返りますと、「夕べの雲」における根づきの実践、場所づくりを経て、生田の丘の上が文学上の磁場になる。そこを訪れた人が、強く庄野文学を思う、思わざるを得ない、そんな場所をつくった。そして、やがてそれが幸福な晩年、もしくは幸福だと人に感じさせる、そんな晩年の生活へとつながり、それと同時に文学作品として実を結ぶ。つまり生活と文学作品の両方をつくり上げていったわけです。さらにもうちょっと言いますと、その庄野文学、その幸福な作品群というのは、大げさな言い方をすれば、庄野潤三を介して、間接的にはありますけれども、父親の貞一がつくった、帝塚山が生んだ文学だということも言えるのでは